

魂 プロの背中

眼科医の服部匡志(たかし)が3月11、12日にベトナム北部の寒村、バンドンに向いて行った無償手術には、日本人の若者5人が同行していた。21、33歳の医学生、看護師、飲食店員、会社員と立場はさまざま。

服部が辺境地への「手術行脚」を始めた2005年以降、こうした若者約70人が自腹でサポートに加わってきた。眼科医が多いが、医療と無関係の人もいて、今回の5人も眼科治療に関しては素人。口をそろえて、「服部さんから、やりがいのある生き

生き方求め若者が同行

方を学びたい」という。網膜硝子体手術で世界レベルで貧しい患者に無償手術を続け、腕を持つ服部が、開業医など10年。「偽善」と陰口をきく

海を渡る赤ひげ ⑤

野口さん(後ろ)にマスクをつけてもらう服部さん。「医療の知識がなくても手伝えることはたくさんある」(3月、ベトナム・ハノイで)



ご感想を、〒530・8551(住所不要)読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファクスは06・6361・0733、メールはosaka2@yomiuri.comです。

同業者もいるが、「求道者」のような活動は口コミで支持が広がり、同行希望者は少なくない。5人もインターネットの情報で服部を知り、メールをやり取りして許可を得た。

11日のバンドン。服部は休む間もなく顕微鏡を覗き込んでいる。傍らで目薬を持つ聖マリオンナ医大5年の河野雄亮(24)は「熱い何か」を感じていた。言葉の壁に物おじしていた同3年の島田真実(21)は、服部に「ジエスチャーで」と言われ、ほとんど患者と笑い合えるようになり、「積極的になれば何とか回っていくんだ」と得心した。

東京の飲食店員、野口美穂(29)は、縁遠い医療の最前線で足がすくんだ。服部は「みんな何かできる。自分で考えて動いて」と言っただけ。患者の大半が

病院に来るのは初めて、と聞いたのを思い出し、近くにいた女性に「大丈夫ですよ」と声をかけて手を握った。不安げだった患者の表情がほぐれていく。小さな達成感があった。

2日目も消毒、ガーゼ交換、血圧測定と、5人は見よう見まねで服部を支え、71人の白内障手術を成功させる一役を担った。帰り際、野口は服部に言った。

「今後、壁にぶつかった時、進むべき道に迷った時、きっと思い出します」

13日夕、服部はハノイのアパートに戻り、テレビのニュースを見て動転した。津波で無残に壊滅した東北地方の町が映し出されていた。福島と岩手には非常勤医として世話になっている病院がある。言いようのない不安がこみ上げてきた。(敬称略)